
ハナノナノ（未定） 4

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 4

【Nコード】

N1664V

【作者名】

希羽

【あらすじ】

今回も縦読み推奨です。よろしければ、みなさん評価お願いします。

Quick 1

七恵結からメールが届いたのは、あれから十日後の朝のことだった。

After Beat Crash

学生生活は軌道に乗り始め、落ち着きのなかった生徒たちも、少しずつ7日間のサイクルに身を委ねていく。

一学年のクラスの数、当たり前のようにアルファベットを使い果たすくらいありながら、一つの教室に収める人数は40人弱で統一され、身を取り巻くのは、思い描いていた授業風景とそう変わらないものだった。むしろ密集率が低く、広々とした間取り。

さて、クラスの最初の行事と言えば、席替え。

入学時は、各々が先祖から受け継いだ誇り高き家名をもとに並べ替えられ、それぞれ宿命的におおよその位置を献上される。

僕は、去年までギリギリ生息していたアオイやアキタのおかげで、教室の番人、最前列、最も右側の席を免れていたが、いかんせんこのクラスには朝夷を五十音順で上回る救世主は在籍していない。

そのために、即席の号令係を任されたり、自己紹介ラリーがスタートしても考える余地が与えられなかったりと、様々な不幸を被ってきた。

そして、本日行われた青春陣取り合戦（席替え）の結果、見事に最後尾の窓際族へと昇進し、使い捨ての肩書きを破棄することに成功したのだ。

だが、この行事の醍醐味は自身の学習環境確保だけではない。忘れてはいけなひのは付近の人物、特に、隣の人間だ。状況によって、今後の学校生活が大きく変わる影響さえある。

僕は窓の外を眺め、どんなタイプの女子と相席になるか、全く気にならない演技に身を投じながら、着席の音を待った。

ちよつとして、ガタツと力強い音がする。

声をかけてくる気配はない。

引き出しの中を探るそぶり、さりげなに一瞥しようと、上半身を90度ねじった。

目に飛び込んできたのは、あし。

アシスタントの略称でも、小難しい文章でお馴染みの植物でもない。

机の上に、おみ足がしつかり二本、交差して乗っかっていた。僕の上半身の四分の一回転は、腰の屈伸運動に変更され、その全景をとらえる間もなく身体を戻した。

窓の向こうに広がる噴水、中庭。美術の授業かなにかか、スケッチブックを抱えた数人の生徒が、お好みのアングルを求めてうろろしている。

三寒四温による3対4のリズムが1対6で進行されているため、日中は早くも暑苦しい日が続く。

僕も水のほとりで涼みたいな、と遠くに意識を置いた。

「つておい」

僕の隣では、机上に足を置いて、腕組みをした男子生徒が何食わぬ顔でふんぞり返っていた。

制服は早くも着崩され、上着のボタンは上から3つまで行方不明。その下から、はみ出た柄物のシャツが『KILL』と艶あでやかなイエローペイントで僕への挨拶を代理する。

髪型に関しては、ハリネズミの様なオールバック、小さめの頭のせいかとても似合っではいるが、それ以前に様々な部分から考慮して異質だった。

そして睨みつけられる。

胸元の『KILL』に『YOU』を添える眼光だ。

「なんだよ？なんか文句あんのかよ？」

「いや、ないけど……」

いい宣伝文句や口説き文句を尋ねられても、僕は歩く検索機械ではないので見つからない。それとも、修道士のモンクのことだろうか？何分、人脈が狭いのでお力添えできず申し訳ないな。

まさかとは思うが、そのナリで苦情の一つも言われないと信じて疑わないなんてことはあるまい。そんな奴がいたら、顔面だけ残して砂場に埋めてやりたいな。

ガンツ

机を軽く蹴られたのも無視して、僕は再び窓の外に目を泳がせた。男子の方が若干多いから、野郎が肩を並べることになるのはわかる。

にしても、最悪な隣人だった。前の席の女子なんか、後ろを気にかけて隣の男子とイチヤイチャしゃべれなくなっただけ困っているじゃないか。

ひょっとしたら、問題のある生徒は後ろに追いやって意図的に目の届かないようにする担任の画策かもしれない。僕がその一人かと訊かれたら、断固否定する自信はないのが辛い。入学早々、校内放送で呼び出され、早くも問題児のレッテルをプレゼントされたのかも。呼び出しの原因が、教員も忌避する要注意人物との救急車ごっこだったのを知られているならなおさら……。

僕は思い出して、こっそりと携帯を取り出した。

受信BOXを開く。中には、静先輩からやたらと送られてきた絵文字ばかりのくだらない怪文書が数件。迷惑メールが数件。一番上にある、アドレス未登録の受信メールが1件。件名には『七恵』の文字。

『九重さんからアドレスきました どうしてもお話ししたいことがあります 今日でなくてもいいので 放課後 N棟4階の部室まで来てください お願いします』

淡泊な文字の並列。

今朝届いたメールだ。

これを受け取ったとき、静先輩はやはり僕に何か望みを託しているんだなと思った。人の気も知らないで。

おおよそ静先輩が七恵結にアドレスを教えたことは考えなくともわかる。

正直、うんざりだ。

今の静先輩は、自分の都合を果たすためだけに僕を利用しようとしている。

もう僕は、これ以上七恵結と関わるつもりはない。もう思い出す必要も意味もないのだから。

時間を空けてゆつくりと考えた。僕が大切なのは、過去の七恵結。訊きたいことがあるのも、過去の彼女。

携帯をズボンのポケットにしまう。

悩むことに意味はもうない。これでやっとおもしはなくなる。

僕は顔の前で拳を強く握った。

「ほう」

右から半笑いの混じった声が聞こえた。

「俺の前で拳を握るたあ、いい度胸じゃねえか」

一体何を思ったのか、机を蹴り倒して隣人は立ち上がった。

前の席の女子は「きゃっ」と悲鳴を上げ、一瞬で教室中が騒然と

なった。

「なんだよ？」

僕もわけのわからないまま腰を上げる。

立ち上がった隣の野郎は、男子の平均を少しばかり下回る身長で、全体的に細く、肉体派を気取るには少し頼りない。

制服もよく見れば、成長を見越して大き過ぎるのを買ってしまったミスチヨイスの典型例を思わせるぶかぶか加減。下手すれば僕より大きいかもしれない。

胸倉を掴まれる、が、下へ参ります。

方向性の不明な怒りが伝わる距離まで顔を引かれた。

鼻の穴の検査でもして欲しいんだろうか。

「こっち見るよ」

眼科検診でした。

「なあ、俺と”ボウリヨク”しようぜ」

恐喝スタイルを維持しながら、遊びに誘うようにわりと友好的な口調。

「野球しよーぜ」とか「ゲーセンいこーぜ」とそう変わらないトインだ。

けど、僕はそんな物騒なネーミングの遊びは知らないので、できれば誘う相手を改めて欲しいという気持ちを込めて「ふざけんな」と睨み返した。

手を振りほどこうとしても離さない。

逆にもつと強い力で、引き寄せられた。

「暇してんだよ。なあ、いいだろ？」

「人にものを頼む態度じゃないな」

「てめーが売ってきたんだろうか」

「握力を鍛えてたんだよ」

「だったらもつとカンタンな方法があるぜ？知りたいか？」

「遠慮しとくわ。単純作業が好きなんで」

「単純だぜ？単純に殴る、以上だ」

「そいつは単純だな。単純に、異常だ」

「てめえも異常だろうが。知ってるぜ？バカみてえな距離をひとひとり担いで保健室に連れてったんだろ？人気者にでもなりたかったのか？」

僕の人命救助の功績は、思ったより大衆に広く知れ渡っているらしい。

「黙れ。お前も保健室まで担いで行かれないか？」

「行けるもんなら、行かれてえな」

「イカレてるな」

「だんだんその気になってきたじゃねえか。まずはお前、一発殴ってこいよ？」

「は？」

野郎は自分の頬を差し出し、細い指でツンツンとおススメの位置を指示している。

行動の意味がわからない。

彼の言う”ボウリヨク”という遊びは、ぶん殴られることが主旨の遊びなのか。

なら字は”暴力”じゃなくて”防力”？

我慢大会に向けて、日夜修業を欠かさない若人なのか。それならボクシング部にでも行って、「ジャブおいしいです」とかいいたがらサンドバックのバイトでも始めていればいい。きっとバイト代で治療費も賄^{まかな}えて経済的ですよ。

「ストレス発散にどうだよ？なあ？」

白目の広さを自慢するように目を見開いて、ほざく。

「キレてんなら殴ってこいよ？さっきからシケたツラしやがってよお。どうした？好きな女にでもふられたか？」

馬鹿にするような笑い混じりで言葉が紡がれた。

こちらの不快さを煽ってくる。

「うるせ」

こいつはどうかして僕に殴られたいらしい。

でも、誘いには乗らない。こんな軽い挑発に乗るのは、頭のネジがぶつとんだバカか、僕の右腕くらいだからだ。

僕が今日のコーヒーだとか、今週のヒット曲だとか、その手のものを毛嫌いしてしまう傾向があるせいだろう。おススメされたほっぺの一点はご遠慮させていただき、鳩尾みそおちに中指の付け根を打ちこんだ。

オールバック野郎はいとも簡単に、後ろ向きで情けなく倒れていく。

キレやすい若者、そんな言葉が頭に浮かぶ。

周りの生徒の視線が僕のどんぶり一杯分の後悔を、大盛りとか特盛りに量増ししてくれる。

冷静だったんだけどな。腕以外は。問題児扱いがネガティブに優遇されそうでこわい。

「へへっ！利いたぜえ」

ぶつ倒れて『K I L L』の文字の下から『M E』が顔を出し、恍惚な表情を見せる少年。

内心で呟く。

こいつやっぱヤベエな。

それとも何か、間違えて、健康になるツボとか押しちゃったのかな。

周りの生徒たちも、ドン引きのようで、先ほど悲鳴を上げた女子など今にも泣きだしそうだ。それをシメシメと慰める隣の男子生徒。

そして、「なんだ！」という声とともにいつの間にか教室を離れていた担任登場。価値観の強要を教養と勘違いしていそうな、生真面目で、立派なオッサンだ。

それから、状況の収集をつけるべく、ぐだぐだと告げ口の早読みコンテストが実施され、当事者ふたりを残して、何かと盛り上がっていた。

最終的に、僕と隣の賀川クソは放課後職員室に呼び出されること

が決定し、新学期最初のニュースとして、昼休みのランチトークに貢献した。

倒れた机を直しながら、賀川クソは僕に、嬉しそうにこう言った。「一発な、とびきりイイヤツ待ってるよ?」

僕は心の一句だと思って聞き流すことにした。

放課後――

清々しいくらいに僕の目算は的を射ていたらしく、一方的で実りのない説法ラジオを一時間以上も耳元で配信された。

完全にリスナー側にまわっていた僕ら二人にとって、その過度な人生観やら教育に関する志の押し付けは、まさにのれんに腕押しを体現しているだけに思えて不憫だった。

体育館並みに広い職員室は、おそらくこの棟の一階の全フロアを使用できていているようで、書類を片手にあちこち走り回る先生達小運動会が目の淵を泳ぐ。

ここだけ見れば、大手の会社のオフィスか教師の学校という言葉がしっくりきてしまう。

無言を貫いた問題児二人は、ストレスのごみ箱を得てご満悦な担任の粹な計らいにより、一週間教室掃除をして帰るという罰則を与えられて解放された。

そして、実効日初日である本日、何の気兼ねもなく帰路に向かうつもりで僕は地下への階段を探し歩き始める。

職員室前の廊下まで、数え切れない教員で埋め尽くされていた。

ここではまるで、子供が場違いになる。

心から「失礼しました」と思って、口を慎んだ。

途中にでかかどある学校内の地図を見ると、同じ棟に地下鉄へ

の経路は無いらしく、隣の棟まで行かないといけないうだった。仕方なく気だるさが付加された両足を上げて向かうことにする。

しばらく歩いていると、とことん意中から外していた僕の不機嫌の源である賀川が後ろからついてくるのに気づいた。

彼は僕の三步後ろを無言で追いかけてくるので、ヤマトナデシコの精神所有者なのかな、と一瞬疑ったけれど、和を以てよしとするタイプでないのは明白なので、警戒を強めて視線を時折振りまいた。先ほどは川柳の自慢をされたと解釈したいけど、どう考えても媚を売られるどころか喧嘩を売られているので、人気のないところに行けば十中八九に四苦八苦することになる。

お叱り中も、不敵な笑みを浮かべながらときどき僕の方を見ていたので油断は禁物だ。

とはいったものの、その喧嘩を買ってしまった僕にも問題はあるはずなので、トイレで油を売って、気休めに売買契約のもとをとることにした。

この学校のトイレは、需要に供給を追いつかせるために少し特徴的な造りになっている。

一つの男子トイレには左右に入口が二つあり、そのちょうど中間の線を軸に中は線対象になっている。まっすぐ奥に伸びた内装は、突き当りと、間の数か所で軸線を横断できるように隙間が設けられている。上手く立ちふるまえば死角をつくることは容易で、追手をひとり撒くにはちょうどいい構造となっているのだ。

さすがに中に人がいないと逆効果だと気づいたのは数歩踏み入れてからだだったが、職員が何人かチラついたので心置きなく回避行動に専念できそうだ。

早足になる。

コツコツ、と案の定ハイエナは獲物を狩るチャンスを狙っていた。僕は左の出入口に入って手洗い場を抜けすぐに右折し、ずらっと並ぶ個室トイレのドアを無意味に開け放ちそのまま小走りで入ったのとは逆の出入り口から出た。

時間差から言って、賀川が右折したときに個室トイレのドアが閉まり、注意を惹きつけて、僕の背中には死角に入っていたはずだ。

無人の個室に気づいた頃には僕のゆくへは見当もつかないだろう。遠回りになるが、一度二階へあがって他の棟に向かうことにした。「今日のところはこれでいいか」

明日からのことは明日考えよう。

それにしても僕もほととついていない。

あんなわけのわからない野郎と隣どうしになり、出会って数分で暴力をおねだりされて、お返しの遠慮に汗を流すことになるうとは…むしろ何か憑いていると考えた方が腑に落ちる。

時間を確認しようと携帯を取り出すと、静先輩からメールが届いていたので、特に何も考えず開いてみた。

50メートル走に助走付きで挑めそうな長い渡り廊下を歩く。

メールの文面は相も変わらず奇怪で、日本語と絵文字の割合がおかしい。不可解過ぎて、暗号が練り込まれている可能性を感じさせる。

こんな文化的な道具で象形文字を送ってくるなど二度手間以外の何なのだろうか。

僕の翻訳能力を尽くして要約すれば、『喧嘩はダメ』とのこと。どこに目が付いていればこの広い学校で僕についての情報を得られるんだろうか。まさか、盗聴器でもつけられてるのか。

先輩面して、後輩の問題行動を注意してくださるのは全く気に触れない。

ただ、その行動の根底には、僕を七恵結と引き合わせる為の何か が常に眠っている気がして、いつまでも素直に受け取れないでいる。静先輩とのやり取りは嫌いじゃないし、むしろあの人は僕の心を許せる数少ない人のはずなのに、ことの巡り合わせが順当に気持ちを抱けなくさせている。今は会うこともしんどい。

いつも通り返信はせずに、携帯を閉まった。

そして、もう一度取り出して、今度はきちんと時刻を確認する。

「またこんな時間か」

そういえば、部活動見学には、結局一度も行っていない。何が理由かと訊かれれば困るけど、そんな気分にはなれない自分がいた。とくに用事もないのに、とりあえず早く家に帰りたい衝動に駆られてしまうのだ。

「消極的すぎるよな…」

高校生活を謳歌できるのか、ますます不安は募る。

廊下を渡り終え、付近にある階段に向かった。

ここは二階なのでそのまま三階層分下れば、地下二階、地下を走る列車の駅にたどり着く。

階段近くには放課後の部活動に精を出す生徒が何人も見受けられ、ラグビーかサッカーかのユニフォームに身を包んだ数人が、大声で何か話しながらちょうど階段を上っているところだった。

「マジだつて！先輩に教えてもらったんだよ！超可愛いらしいぜ」

「はいはい、お前この前もそんなこと言つてマニアックだったじゃないか」

「今度はマジだよ！ぜつてえおまえ後悔するぜ？可愛かったら俺に千円な！」

「じゃあ可愛くなかったら俺に一万くれよ？」

他愛もないやりとりが楽しげに聞こえる。少し体格のいい三人組が、階段を上つてゆく。

同じ一年生でも、しっかり部活動で人間関係を広げている人もいるようで、何故かほんのり劣等感を抱いてしまった。

専念している目標は、部活と違うみたいだけど。

一階へ伸びる階段に一步踏み入れたところで、会話が気になり始めた。

「そいつって一年なのか？」「いや、留年してるらしい。入院してたとかで」「は？お前それって例のヤクチュウの奴じゃね？」「ヤクチュウ！？何だよそれ？」「俺もそれ知ってるぜ。なんか彼氏に

ふられてクスリで自殺しようとしたらしい」「マジかよ？それってヤバくね？」「それでアタマおかしくなって、ひとりでヘンな部活作ってるのか」「ヤクとかに手を出す時点でありえねーだろ」「あ、でも、実際は普通らしいぜ？避けられてるだけで、落ちついてるっばいし」「いやいや、いきなり叫びだされたらシヤレになんねえって！ぜってえ俺ビビるわ…」「逆におもしろそじゃね？マジで可愛かったら好き放題できるかも、アタマおかしいんだろ？」「お前マジ最悪だな！」「とか言って笑ってんじゃねえか！途中で逃げんによ？」「最初にビビったやつが罰ゲームな？」「ったくお前らほんと――

聞き取れないところまで三人は行ってしまう。

その会話が、静止しているだけの僕の頭に血を上らせた。

我に返り、すかさず携帯の受信BOXを確かめた。

アドレス未登録の一通。その中にある『N棟』の文字に目を走らせ、二階の踊り場、足元を噛みつくように眺める。

N - 2

七恵結が待っているのは、この棟の4階。

そしてさっきのやつらは――

（後書き）

ありがとうございました。

ご意見・ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1664v/>

ハナノナノ（未定） 4

2011年7月25日03時37分発行